

夢を見る目に、見えない支え

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校 3年 田淵 心優

税金とは、私たちの暮らしを見えないところで支える力。大人に近づく中学最後の夏、その力が海の向こうの誰かの命や笑顔、夢までも支えていることを知った。

私は以前、ドキュメンタリー番組「世界の子どもの未来のために」をよく見ていた。そこには、厳しい環境で日々懸命に生きる子どもたちの姿があった。市場で深夜まで働く子、掛け持ち仕事で家族を養う子、危険な線路沿いでゴミ拾いをする子。学校に通えない子どもはたくさんいた。

番組では、取材した子どもに将来の夢を尋ねる場面がある。「学校の先生になりたい」「お医者さんになりたい」「警察官になりたい」――。苦しい生活の中でもそう語る彼らの表情は希望に満ち溢れていて、今でも私の胸に強く残っている。

一方で、何度も辛い現実直面し、その夢を諦めてしまう子どもも中にはいた。

同じ「子ども」である私と彼らの生活は、あまりにも違った。私は毎日安全な道を通って学校に行き、教科書や文房具も揃っていて、ご飯もある。病気になれば病院に行ける。これらはすべて当たり前のことのように感じていた。しかし彼らを見て、その当たり前はとても恵まれたことで、それらは税金によって支えられているのだと気がついた。

ある日、彼らのような子どもを取り巻く環境を変える方法はないのか調べてみたところ、JICA(国際協力機構)がODA(政府開発援助)を通じてボリビアで井戸の掘削をしたときの記事を見つけた。簡単に安全な水を汲めるようになり、病気にもかかりにくくなったそうだ。井戸ができた後はポンプで水を出せるようになり、そのときの現地の子どもたちの弾ける笑顔の写真が印象的だった。

ODAとは開発途上地域の暮らしをよくするために行う政府の国際協力のこと、財源の一部は税金で賄われている。他にもODAを通じて学校や教室の建設、教科書や学用品の提供、予防接種や病気の治療支援などを行っている。税金が、国の中だけでなく世界の子どもたちの生活向上に役立っているのだ。

もしもこのような支援が広がり番組で紹介されていたような子どもたちにもしっかり届けば、誰もが安心して学校に通い、自分の夢に向かって歩き始めることができるはずだ。

将来私が働いて税金を納めるとき、そのお金は誰かの暮らしや命を守り、笑顔を支え、夢へとつながる道をつくるかもしれない。そう考えると税金を納めることは単なる義務ではなく、世界の誰かへの応援だと思えてくる。

JICAの記事やドキュメンタリー番組で見た子どもたちの笑顔を思い出すたび、私はこう思う。「夢は誰にでもある。そして、その夢を叶えるための土台をつくるのが、税金なのだ」と。